「善と悪のパラドックス」：ホミニン人類進化からの一考察

函館市医師会
函館五稜郭病院
中田　智明（なかた　ともあき）

肥満パラドックス、フレンチパラドックス、高血圧パラドックスは臨床医学でも有名であるが、ここでは「善と悪のパラドックス」を取り上げたい。

毎日のように無慈悲に隣国に対して残虐な行為を命令している指導者が、翌朝には神に向かって敬虔に祈りを捧げていた。偽善なのか、両者が併存する「善と悪のパラドックス」なのか、と頭に浮かんできた。10世紀に遡るキエフ・ルーシにルーツを持つウクライナに対する戦争は、まさに尊属殺人に匹敵するようにみえる。ハーバード大学人類学者のリチャード・ランガムは、その著書「善と悪のパラドックス」(原題は The Goodness Paradox)のなかで、ホミニンは人類進化の過程で直立二足歩行獲得からホモ・サピエンスに至る詳細な化石の分析を行っている。そして、ホミニン進化の過程で、他者に対する攻撃性・食料争奪戦と仲間に対する融和性・共存という「善と悪のパラドックス」を明らかにしてきた。肉親・同族者への愛情、歩くことが困難な傷病者の介助（当時、基本的に歩けないことは死を意味した)、死者への敬虔な祈り・埋葬、こうした精神性・社会性の進化が人類化石に刻印され解明されてきた。

一方、飢餓との戦い、厳しい生存競争、野生の捕食者や敵対的ホミニン同士の殺戮も延々と繰り返されてきた。卵生生物と異なり、胎生の哺乳類はおしなべて我が子に深い愛情を尽くすが、他者、他種に対しては冷酷だそうだ。類人猿と我らが祖先のホミニンは600万年前に別れ、さらに20万年前アフリカでホモ・エレクトスとの共通の祖先から分岐して、我ら現生人類ホモ・サピエンスが誕生したことを、最新の分子生物学が詳細に解き明かした。この約580万年間の進化の過程で、「善と悪のパラドックス」がいまだ克服できていないのはなぜであろうか？
ホモ・サピエンスも生物である以上、食料の獲得のためにはその運命（原罪？）からは逃れられない。そもそも捕食は生物（動物）の必然悪である、生物学的進化（遺伝子変異）に善悪の判断は規定され得ない、ためであろうか？　あるいは人類は殺戮・戦争の歴史を学びながらも、まだまだ進化しえない、その途中、理性・精神性の発達段階にあるからなのか？　ちなみに同じ類人猿同士で、現時点でその進化の頂点にあるチンパンジーとボノボでは違うらしい。同族他者に対して、前者は凶暴性・防衛意識が強く、後者は融和性・協調性が高い、といわれている。その理由は正確には未解明ながら、環境の豊かさ（安全性や食料調達の容易さ）が影響しているらしい。遺伝子的優位性はないにもかかわらず、同じホモ・サピエンス同士で肌の色、言語、宗教・歴史・文化、生活習慣の違いを半ば根拠に未だに横行する優越意識と差別、阻害と殺戮がなくならない。しかし、これは「どの個体（一人の人間）にも、善と悪の可能性が備わっている」（R・ランガム）ためらしい。定説ではあるが、直立二足歩行が脊椎全体で重力に抗して大きく発達できるよう脳を支え、進化をもたらしたといわれている。さらに重要なことは、直立二足のおかげで、四足時代に比し約２倍以上に視界が開けたこと。これは、ハイハイから一人立ちを達成した後の幼児の脳の発達と軌を一にしている。四足より二足は捕食者から逃げるのは遅いが、高く広く確保された視野により情報量が格段に多くなり、前頭葉の進化とともに敵や危険を早く察知し、豊富な水・食料・安全な住処を見つけやすくなった。このような知識の獲得、飢餓リスクの低減と栄養状態の改善は体格そして脳の発達をさらに加速した。直立二足歩行で視野が広がり、より豊かで安全な外の世界への知的好奇心も強化された。数百万年にわたる旅をしてきた人類化石の解析から、幼子・老人あるいは怪我人を伴って危険性の高い旅路を、集団で共感と助け合いをもって移動する姿が証明されている。そして約５万年前には、いよいよ出アフリカが実現した。その後の西アジアを経由した世界進出の旅は、近年のミトコンドリアDNA分析によりその詳細が明らかになってきた。

ちなみに、旅行好き、高い所に登りたがるのも、そうした現生人類の視覚的刺激と知性好奇心をくすぐる脳の進化の仕業らしい。こうしてみてくると、ルソー派や孟子の生来平和的・性善説やトマス・ホッブス派や荀子の生来暴力的・性悪説のように、ヒトを単純な二項対立では説明できないように思われる。善と悪のパラドックスは長い人類進化や生存競争を勝ち抜く必然悪・原動力であったかもしれない。現代に生きるホモ・サピエンスとしては、「善と悪のパラドックス」への向き合い方として、人類学的科学的視点に加え、社会・歴史・文化に関する豊かな多様性と大きな寛容性を備えた物の見方が、今後の脳の進化を待つまでもなく、必要に思われる。そんなことをつらつら考えながら、今日もウクライナの人々の平和を願っている。